

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19720104
 研究課題名（和文）近世後期から明治期にかけての江戸語・東京語のモダリティに関する研究
 研究課題名（英文）Study on Japanese modal forms from the Edo era to the Meiji era

研究代表者
 氏名（ローマ字）：岡部 嘉幸（OKABE YOSHIYUKI）
 所属機関・部局・職：千葉大学・文学部・准教授
 研究者番号：80292738

研究成果の概要：

江戸時代後期から明治初期の江戸語・東京語資料として信頼のおける文献を調査、選定し、それらの文献の電子テキスト化を行った。さらに、それらの電子テキストを利用して、江戸語・東京語において用いられた当然・必然を表わす形式（ハズダ、ニチガイナイ、ベキダ、ナケレバナラナイ）、推定を表す形式（ヨウダ）およびソウニスル、ソウニナルという連語形式の用例を収集し、それらの形式の意味・用法の実証的な記述と分析を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	0	2,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	240,000	3,040,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：江戸語、東京語、モダリティ、電子化テキスト

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は近世後期江戸語から明治期東京語のモダリティ形式(ここでは広義の推量・推定を表す形式および当為判断を表す形式をこう呼ぶ)に関するものであるが、近世後期江戸語から明治期東京語のモダリティ形式をめぐっては以下のような背景(状況)が存在した。

(1)近世後期江戸語において使用されるモダリティ形式をめぐっては、どのような作品にどのような用例があるのかは既に多くの先

行研究によって調査されているが、個々の形式の意味・用法が具体的にどのようなもので、どのような広がりをもっていたのかということの検討は、管見の限り、手薄であると思われた。つまり、従来の江戸語研究では、あるモダリティ形式の意味が、たとえば、「推定」を表わすと記述されるだけで、それ以上掘り下げられてこなかったのである。そのことの背後には、江戸語のモダリティ形式が形態的に現代語とほぼ一致することから、その表す意味や用法の広がりも現代語と同様だろうという予断のもと、実際の用例が

十分検証されてこなかったということがあるように思われた。本研究の研究代表者は、この問題点をふまえて、江戸語の推定を表わす形式（ヨウダ、ラシイ、ソウダなど）について、現代語のモダリティ分析の成果を援用しながら、個々の用例を精密に検討・分析し、その意味・用法を詳細に記述するとともに、個々の助動詞における用法相互の関係を明らかにしてきた。今後は、必然性判断を表わす形式であるハズダ、ニチガイナイや当為判断を表わす形式であるベキダ、ナケレバナラナイなどについて、信頼できるテキストによる大規模かつ具体的な用例調査が待たれる状況であった。

(2) 近世江戸語と現代語で形態的には同じ形式であっても、その表す意味が異なる場合があることは、先行研究などによって知られていた。たとえば、「推定」を表わすヨウダや連用形接続のソウダの連語であるソウニスは江戸語と現代語でその表す意味が異なっている。しかし、いつ頃、どのような要因でそのような変化が起こったのかということの具体的な記述は、明治初期東京語の資料整備が遅れていることもあって、未だ不十分であり、やはり信頼できるテキストによる具体的な調査が待たれる状況であった。

2. 研究の目的

以上のような背景に基づいて、本研究課題は、以下の2点を目的とした。

(1) 必然性判断を表わす形式（ハズダ、ニチガイナイなど）と当為判断を表わす形式（ベキダ、ナケレバナラナイなど）について、個々の形式の表わす意味・用法がどのようなものであるか、また、それらの形式の用法の広がりやどのようなものであるかを、信頼できるテキストを用いて、詳細に記述・分析すること。

(2) 近世後期江戸語と現代語とで同じ形態でありながら、その表わす意味に違いがある形式をとりあげ、いつ頃、どのような要因でそのような変化が起こったのかということをも具体的に記述すること。具体的形式としては、「推定」を表わすヨウダ、および連用形接続ソウダの連語形式であるソウニスルとソウニナルをとりあげ、それらの意味・用法変化の様相を、信頼できるテキストから収集した事例に即して明らかにすること、ならびに、そのような変化が生じた動因を明らかにすること。

3. 研究の方法

以上のような目的を達成するため、本研究課題では以下のような方法をとった。

(1) 調査資料の電子テキスト化とテキスト校訂

調査対象とする形式の意味・用法や意味・用法変化の実態を実証的に記述するためには、用例を迅速かつ大量に調査することが必要となる。そこで、本研究では、調査資料の電子テキスト化を行う。

また、記述の実証性を高めるためには、調査資料を資料的に信頼できるものとする必要がある。そこで、本研究では、専門的知識を有する者（研究代表者など）による構築した電子化テキストと原本との校訂作業を行う。

(2) パソコンを用いた大規模な用例調査

本研究の実証性を高めるために、パソコンを用いて、(1)で構築した電子テキストを対象とする大規模な用例検索を行う。

(3) 諸形式の意味・用法の記述

(2)により収集したハズダ、ニチガイナイ、ベキダ、ナケレバナラナイなどの用例を、現代語のモダリティ分析の手法を援用しながら分析し、その意味と用法を整理する。また、用法相互の関係を明らかにする。

(4) 用法の意味的变化の実態の記述とその動因の分析

(2)より収集したヨウダおよびソウニスルとソウニナルの用例をもとに、それらの形式の用法の意味的变化の実態を記述し、さらに、類義的形式との関係という観点から、用法変化の動因を分析する。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果は以下のとおりである。

(1) 信頼性のある近世後期江戸語資料の整備と電子テキスト化

近世後期江戸語資料として、①『四時遊観花筐』(人情本、松亭金水作、天保12(1841)年)、②『正史実伝 伊呂波文庫』(人情本、二世為永春水作、天保7(1836)～明治5(1872)年)の電子テキスト化を行うとともに原本(研究代表者所蔵本)との対照・校訂作業を行い、入力ミスや誤記などを改め、テキストの信頼性を高めた。特に、②は、江戸後期(1836年)から明治初期(1872年)にかけての36年間に発行されたという時間的な長さ、巻数にして54巻という分量的な多さ

において、江戸語から東京語への言語の意味変化や用法変化を検討する際の重要資料であり、これを電子テキスト化できたことは、江戸語・東京語研究における一つの貢献だといえる。今後は、このテキストの精度（信頼性）をさらに高めた上で、多くの研究者がべ便利に利用できる形（たとえば、web 上での資料公開やXML形式のタグ付きコーパスの構築など）を考えていきたい。

(2) 明治初期東京語資料の整備と電子テキスト化

明治初期東京語資料として、①『富士額男女繁山（女書生繁）』（歌舞伎台帳、河竹黙阿弥作、明治10（1877）年）、②『人間万事金世中』（歌舞伎台帳、河竹黙阿弥、明治12（1879）年）、③『月宴升毬栗（散切お富と坊主與三）』（歌舞伎台帳、河竹黙阿弥作、明治5（1872）年）、④『霜夜鐘十字辻笠（霜夜鐘）』（歌舞伎台帳、河竹黙阿弥作、明治12（1879）年）、⑤『木間星箱根鹿笛（おさよの怪談）』（歌舞伎台帳、河竹黙阿弥作、明治13（1880）年）、⑥『月雪花戀路の踏分』（明治期戯作、頓陳漢斑馬述、香夢亭主人編、明治16（1883）年）を電子テキスト化した。①～⑤については黙阿弥による自筆台帳が存在しないため、電子化テキスト入力時に使用した『黙阿弥全集』（春陽堂）の本文を参照して校訂作業を行い、入力ミスなどを改めた。⑥については原本（研究代表者所蔵本）による校訂作業を現在継続している最中である。現段階では、参照できる明治初期東京語の資料が少ないので、ここに挙げた資料を整備できたことは江戸語・東京語研究にとってはひとつの成果であると思われる。しかし、明治初期東京語資料については、当該の資料が明治初期東京語の資料として信頼でき得るかどうかを、より広範な文法的指標から検証しなければならないという資料性の検証の問題が存在する。これは今後の課題である。

(3) ハズダ、ニチガイナイ、ベキダ、ナケレバナラナイの用例採取と意味・用法の分析

構築した近世後期江戸語および明治初期東京語の電子化テキストを用いて、必然性判断を表す形式ハズダ、ニチガイナイ、および当為判断を表す形式ベキダ、ナケレバナラナイの用例を採取して、それらの形式の意味・用法を整理した。

ハズダとニチガイナイに関しては、ニチガイナイが推定用法（下記の例文（ア））に特化しているのに対し、ハズダは推定用法のほかに、納得用法（下記の例文（イ））や現実との食い違いを述べる用法（下記の例文（ウ））など様々な用法をもっており、その

範囲はほぼ現代語と同様であることが確かめられた。以下に例文を挙げる。

- (ア) 侍「イヤこれは面目ない事」ト四邊を見まはし、「實に落したに違ないが、他人の噂になつては外聞が悪い。（伊呂波文庫）
- (イ) お前さんも男だらう、一旦斯うと思ツた女を、思ひもとげずに仕舞ツちやア、口惜のも其筈サ。（伊呂波文庫）
- (ウ) ▲「最早出仕の筈でござるが何と致した事であらう」ト互に間合ふその中に（伊呂波文庫）

ベキダについては、近世後期江戸語においても明治初期東京語においても、現代語に比べて、行為指示的な側面が弱く、むしろハズダに近い用法が存在するという特徴があることがわかった（下記の例文（エ））。また、ナケレバナラナイについては、近世後期江戸語および明治初期東京語において、そもそも用例の絶対数が少ないこと、また、意味としては現代語と同様に、状況からの必然を表す面が強い（下記の例文（オ））ことが確かめられた。以下に例文を挙げる。

- (エ) 正道「思ひがけなく娘御が身を投ぜんとしたるを、我が助けたる縁により、今日まで繁が知らざりし父の横死を聞くのみか、敵の手掛り知れるといふは、思へば不思議なことであつた。」
△利右「疾くにも御存じあるべきを、蓮華寺村から其時に、なぜお知らせがござりませぬな。」（富士額男女繁山）
- (オ) 此身ア明日は先頃借りた六貫の錢と、貸夜具の損料を二貫四百遣らなければならぬ。（伊呂波文庫）

これらの指摘は、管見のかぎり、先行研究ではなされていない。その点において、一定の意義をもつものと思われる。

今後、これらの結果について、現代語との比較を含め、より詳細な検討・分析を行うことが課題である。

(4) ヨウダの用例採取と意味・用法の分析

構築した近世後期江戸語および明治初期東京語の電子化テキストを用いて、「推定」を表わすヨウダの用例を採取し、意味・用法の整理を行った。

近世後期江戸語および明治初期東京語のヨウダにおいては、「内実推定」用法（目の前の状況の内実を推定するもの、下記の例文

(カ) (キ) や「自己の感覚」用法 (自己の内的感覚を言語化するもの、下記の例文 (ク) (ケ) など、話し手の把握した現状を感覚的に描写する用法が主な用法 (用例数の多い用法) であり、現代語に見られる「原因推定」用法 (目の前の状況の原因を推定するもの) は周辺の用法 (用例数がごく少数に限られる用法) であることがわかった。以下に例文を挙げる。

- (カ) 「…大粒なのが交つて降つて來ましたから、初雪に爲ちやア随分積りさうに見えやすぜ。」
△瀧「なる程、是は本降になつたやうだネエ。」(伊呂波文庫)
- (キ) 内へ入らうか止さうかといふ思入あつて、小聲にて、はい御免下さりませ。
△勢左「誰か表へ來たやうだ。」(人間萬事金世中)
- (ク) 庄「コウお安さん、おまへ達は狐ちやアねへか。あんまり嬉しくつて氣味のわりいやうだ。」(伊呂波文庫)
- (ケ) 「…向うから來る散切りは、目鏡橋で此間見掛けた書生に似て居ますぜ。」ト小助向うを透し見て、
△小助「成程身形が似て居るやうだ、…」(富士額男女繁山)

研究代表者の予想とは異なり、明治初期東京語においては、近世後期江戸語との顕著な用法の差異は見いだせなかった。今後、明治後期東京語、大正期東京語などの調査を進め、どの時点で用法の差異 (変化) が見いだせるのかを具体的に検証することが課題である。

(5) 連語ソウニスル・ソウニナルの用例採集と意味・用法の分析

構築した近世後期江戸語および明治初期東京語の電子化テキストを用いて、連用形接続のソウダの連語形式ソウニスル、ソウニナルの用例を採取したが、今回構築した電子化テキストの範囲では、ごく少数の用例しか得ることができなかった。今後は、さらに調査対象テキストを増やし、十分な用例数を確保することを目指す。

これらの形式の意味・用法の分析のためには、上に述べたように、もう少し多くの用例が必要であり、現段階では、確定的なことは述べられない。先行研究における報告も含め、これまでにわかっていることを述べると、近世江戸語においては、ソウニスルが現代語でいうソウニナルの表す意味 (将然相) をも表していたが、明治期東京語では、ソウニスルが上接の用言の種類を狭めていく形で、現代語と同様の意味だけを表すようになったと

いうことである。なぜ、ソウニスルがそのような意味・用法変化を起こしたのかについての検討は、十分な用例数を確保した上での今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕 (計 1 件)

①森 雄一・西村 義樹・山田 進・米山 三明編、くろしお出版、ことばのダイナミズム (執筆部分: 岡部 嘉幸、雑誌『太陽』における時の助動詞覚書—文体と時の助動詞使用のダイナミズム—)、2008 年、pp.353-368

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡部 嘉幸 (OKABE YOSHIYUKI)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号: 80292738

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号: